

Title	彙報 : 昭和四十八年十月より昭和四十九年六月まで
Author(s)	
Citation	東方學報 (1974), 47: 301-306
Issue Date	1974-11-30
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/66519">https://doi.org/10.14989/66519</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

# 彙報

昭和四八年一〇月から  
昭和四九年六月まで

## 研究状況

### 班 研 究

#### 東 方 部

##### 漢書の研究

班長 川勝 義雄

漢書のうちでもとくに志の部分を中心にして會讀譯注を行なってきたが、そのうち「食貨志」「溝洫志」および「律曆志・上」の譯を終り、その注を作成しつつあると同時に、班員の永田英正によって食貨志本文の校勘記が作られた。また「律曆志」の譯は川勝と橋本敬造によって近く公刊される豫定である。なお現在、毎週一回の會讀では「郊祀志」の譯注をつづけている。

##### 漢代文物の研究

班長 林 巳奈夫

引つづき、劉熙「釋名」の文物關係の編を關係遺物、圖像を参照しつつ會讀を進めた。本年六月までに讀んだ編の名と擔當者は左の通りである。

- 「釋宮室」 秋山、林
- 「釋牀張」 小南
- 「釋書契」 永田
- 「釋典藝」 杉本
- 「釋用器」 町田
- 「釋樂器」 橋本
- 「釋兵」 桑山

##### 隋唐の思想と社會

班長 福永 光司

五世紀から八世紀半ば—劉宋王朝の成立から安祿山の亂の勃發—に至る中國の社會において、佛教（佛典）が如何にして漢字文化の中に組み込まれ、中國民族の哲學的思考の中に取り入れられたか、また、それを可能にした中國の歴史的・社會的條件ないし基盤は、いかなるものであったかを綜合的に考察する。

第一年度は吉藏の『三論玄義』、第二年度は眞諦譯『大乘起信論』、第三年度、第四年度は唐の道宣の編著『廣弘明集』のうち、五世紀以後の中國知識人の佛教に關する論著を主として會讀をおこなったが、第五年度（最終年度）は『廣弘明集』を前年度と同じ方針で讀み進めるとともに、その間に班員それぞれ専門的立場からする研究發表をまじえ、課題に對する有機的かつ綜合的な研究を推進しながら、この班の研究報告「中國における佛教の受容（假題）」の刊行を準備する。

##### 敦煌寫本の研究

班長 藤枝 晃

従来より繼續の北朝期寫本については、あらかじめその講讀と編輯原稿の作成を終ったが、若干の未見寫本があることと、刊行方法について成案が固まらないこととのために、五〇年度以降に刊行にとりかかるとした。

その代りに四九年度末に『東方學報』敦煌研究第二專號を刊行することとし、四月くらい毎週の

研究會で各班員がそれぞれの論文の豫報を行なった。

##### 中國佛教史學史の研究

班長 牧田 誦亮

佛祖統紀法運通塞志の會讀は、本年六月末で終了した。資料的にも重要な宋代の佛教史を扱った卷四十三以降の佛祖統紀の記事は、班員の研究意欲を高揚させるものであった。續いて法門光顯志・歷代會要志に移る。附帶して進行中の中國高僧傳索引第三卷唐高僧傳索引（中）は、全部舊漢字使用という立場から、印刷工程の物理的な困難のため、刊行を一年繰り下げねばならなくなり、目下校正中である。このため第四卷として編纂した同索引（下）も昭和四十九年度中に同時に刊行される。なお宋高僧傳索引（上）もおおむね編集を終えた。

##### 朱子研究

班長 田中 謙二

『朱子語類』を自在に驅使することによって、手垢にまみれた従來の朱子像からへもうひとりの朱子」を析出せんとする我々の試みも今年で最終年を迎え、その成果はすでに班員の胸のうちで胎動しつつある。今期は柳田聖山氏の協力を得て、難解きわまる卷一二六・釋氏を讀了、これをもって會讀は終り、九月から参加メンバーによる研究報告に入る。

##### 天下郡國利病書の研究

班長 日比野丈夫

『天下郡國利病書』は明末清初の學者顧炎武の著わした地理書であるが、當時の行政區劃の順序に配列された、明代の社會經濟資料集といつてよい。従來これを全體的に研究對象としてあつたかたものはないので、この書にあらゆる方面から徹底的分析を加え、顧炎武の學問とともに明代の歴

史地理、ないし社會經濟史の解明に寄與しようというの目的である。開始以來すでに四年を迎えたので、近く班員各自の得意とするところをまとめ、報告書として出版することを計畫している。

五・四運動研究

班長 島田 虔次

昨年四月に發足した本研究班は、辛亥革命から國民革命に至る時期を対象として、五・四運動が近・現代の中國に及ぼした影響を、政治・社會・思想・文學等の諸側面から多角的に解明しようとするものである。五ヶ年計畫の前半二年は、當時の雰囲気をつかむため雑誌『新青年』を順次通讀しているが、この作業は今年十一月を以て完了する豫定である。これと並行して、五・四の日曆、文獻目錄作製の作業も順調に進展している。なお、四十九年度の非常勤講師は、大阪工業大學講師近藤秀樹氏にお願いしている。

一〇月五日 新青年第三卷二・三號

藤田 敬一

一〇月二日 歐米に於ける五・四研究の動向

守川 正道

一〇月一九日 新青年第三卷四・五號

小野 信爾

一〇月二六日 // 第三卷六號第四卷一號

近藤 秀樹

一二月二日 // 第四卷二・三號

小林 武

一二月一六日 ソ連に於ける五四研究の一端

伊藤 秀一

一二月三〇日 新青年第四卷四・五號

堀川 哲夫

一二月七日 // 第四卷六號第五卷一號

吉田 富夫

四九年

一月一八日 新青年第五卷二・三號

藤本 博生

一月二五日

朝鮮通信使の日本觀 姜 在 彦

二月八日

五・四日曆 竹内 實

四月二六日

丁文江の生涯 島田 虔次

五月一〇日

新青年第五卷四・五號

五月一七日

森 時彦

五月二四日

// 第五卷六號第六卷一號

五月三一日

副島 圓照

六月七日

// 第六卷二・三號 河田 悌一

六月一四日

// 第六卷四・五號 狹間 直樹

六月二一日

研究生活の回憶 天野元之助

六月二八日

新青年第六卷六號第七卷一號

// 第七卷二・三號

小野 和子

六月二八日

// 第七卷四・五號 吉田 富夫

科學者列傳の研究

班長 山田 慶兒

科學者と技術者の傳記をとおして、中國の科學技術の特質をとらえようというのがねらいである。そのために、時代を追って、正史のなかの科學者技術者の列傳を會讀している。現在、隨書まで讀みすすんでいる。なお、同時に、博物志の譯注をも進めており、いずれ出版する豫定である。

漢籍委員會

委員長 永田 英正

毎週一回の委員會を續け、漢籍整理の實習と整理業務の處理とを行なっている。本年五月に開催

された第三回漢籍擔當職員講習會(文部省・京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センター共催)に全面的協力した。

類目委員會

委員長 市原 亨吉

東洋學文獻類目の編纂は、一九六五年(昭和四〇年)からは、本所附屬の東洋學文獻センターが中心となり、所内より、協力を得て進められて来たが、一九七〇年四月より、新たに類目委員會が發足して編纂を擔當することとなり、所内よりの協力體制が一そう強化され、内容の充實が期待されるに至った。毎週一回、定期的に會合して、編纂のための共同作業を実施している。一九七二年度版を昭和四九年三月に出版した。ひきつづき一九七三年度版を準備中である。

日本部

一九三〇年前後の政治と社會

班長 井上 清

この研究班は日本資本主義の危機が深化する一九三〇年前後の対象として、當時の政治・社會・思想・文化狀況を總合的に究明することを目的としている。現在まで各人の問題意識にもとづいた報告を素材に討論をかさねてきたが、今年度はテーマごとの集中的研究・討論もおこなっている。日本における市民文化の形成

班長 林屋辰三郎

第一期「化政文化の研究」にひきつづき、昨秋より、第二期「幕末文化の研究」がすすめられている。政治・經濟的な事件史として把握し難い、この激動の時代の文化構造を、總合的に解明しようとする。現在、化政と對比しつつ天保の文

化像の検討がなされるなかで、新たな方法の摸索も試みられている。

### 社會運動の研究

班長 渡部 徹

第一期の研究成果を、八月末『日本社會主義運動史論』(三一書房)として公刊したのについて、第二期は兩大戦間の社會運動を中心に研究會をスタートさせている。運動の實態とそれを分析する方法をさらに深めてゆくことが、ひきつづいた課題として豫定されている。

### 家族問題の研究

班長 太田 武男

この研究は、夫婦・親子・相續などをめぐる諸問題に関する理論的・實證的研究を、その主たる目的ないし内容とする。従來、この方面の研究は、それぞれの専門分野において個別的に行なわれていたが、今回の研究は、法律學的な觀點からの考察を中心としつつも、それに社會人類學的な觀點からの考察をも加えて、總合的に行なわんとする点において特徴的である。昭和四一年四月より毎週一回研究會を開いて、主として夫婦問題、なかでもとくに「離婚問題」について研究をすすめ、その成果は『現代の離婚問題』(有斐閣)として世に送り、その後、昭和四四年四月からは、主として親子問題を中心に研究を進め、とりあえず、各専門分野からの親子観ないし親子關係の本質、養子制度などについての検討を行ない、昭和四九年三月末をもって一應研究討論を終り、目下、報告書『現代の親子問題』(有斐閣近刊)を執筆中である。また、昨年度文部省特定研究「産業構造の變革にともなう諸問題」が設定されたので、この研究班は、家族關係の變遷をテーマにその研究にも参加することになり、昨年夏休暇を利

用して、堺市九間町において家族生活の實態を調査した。このたび刊行された「都市における家族の生活」(人文調査報告一九號)は、その調査報告である。

### 現代都市の研究

班長 太田 武男

この研究班は現代都市のかかえる諸問題を総合的に解明することを目標としているが、當面は日本の大都市、とくに京都と大阪を對象として、その政治、經濟、社會構造を實證的に分析するべく努力している。

### 西 洋 部

#### フランス第二帝政期の研究

班長 河野 健二

二月革命とパリ・コミューンにはさまれたフランス第二帝政期は、わが國學界において研究のかなり脱落している時期といえよう。ブルードンの研究を進める過程で、この時代のもつ意味(とりわけ現代にたいするゆたかな示唆をもつ點で)に気づき、これを社會と文化との両面から攻究していくことにした。

#### 西洋近世論理想思想の研究

班長 上山 春平

準備作業として繼續している『ポール・ロワイアル論理學』の論讀はそろそろ完了の見込であり、この作業の結果いくつかの研究問題點が浮かび上ってきた。これらの問題點について、四十八年度より加わった所外班員と共に本格的検討を加えていく豫定である。

#### 知識人層と社會

班長 會田 雄次

四十八年度に發足したこの研究班は、最初の一年間は、廣く問題をあらわすことに費した。ことに、確立された近代的知識人とはちがって、前

近代社會では、何をもって、知識人とみなすか、について、多種多様な事例、假説が出された。藝術家、初等教育者、職人、旅行家など、從來では、正統的地位をみとめられなかった「知識人」などである。

### 文明の比較社會人類學的研究

班長 梅棹 忠夫

從來、未開社會の研究に主力をむけられていた社會人類學研究方法をもちいて、世界の諸文明の比較研究をおこなう目的で、地理學・言語學・歴史學など多方面からの研究者を結集してきた。「比較文明學」の構築を目ざしてきた本研究班も、一九七四年三月三十一日をもって解散することになった。將來、この研究班で蓄積された成果が、多方面にわたって花ひらくことが期待される。

#### アフリカ社會の研究

班長 梅棹 忠夫

本班は京都大學關係のアフリカにおける人類學調査の經驗者を中心に構成されている。現地調査の結果を理論化する作業が續けられている。その成果の一部は Kyoto University African Studies として毎年一冊出版されている。五〇年三月末には Vol. IX と X を發行する豫定で現在編集をすすめている。

#### 理論人類學の研究

班長 梅棹 忠夫

人類學研究における理論的側面および方法論的開拓をめざす研究班である。從來この方面の研究はすすんでおらず、新しい試みとしてはじめられたものである。とくに精神人類學および人類學におけるモデル形成をめざして研究をすすめてきた。今後とも、このテーマにそった追究はつづけられる豫定である。

社會と文化との比較人類學的研究

班長 谷 泰

未開社會から高文明社會にいたる人間社會が、廣い範圍と厚い層をもつて、同時に存在する世界において、それらの個々の社會や文化を、獨立した特殊としてとりあげるのではなく、より普遍的基準體系の中で位置づけることが求められている。本研究班は、比較人類學的方法をもつて、言語學、地理學、社會學、心理學など他方面の研究者との協力の上で、個々の社會や文化の、より客觀的位置づけを目指すものである。

人類學における方法論的研究

班長 谷 泰

人類學は、生物的存在であると同時に文化的存在でもある人間を對象としている。この人間はまた通時的な連續性をもつと同時に、同時的な統一をもっている。人類學の理論や方法は、したがってきわめて多様である。本研究班は、これらの方法を自覺的にとらえ直し、新たな方法論の開拓を目ざしている。當初は、言語分析の方法をとりあげ、その現實的適用の中で、この方法の洗練、有効性と限界の検討を行ない、新たな方法上の視野をひろきたい。

現代における知識の意味

班長 樺山 紘一

個々人の學問的方法と問題意識とをめぐって、最終的な検討、討議がおこなわれ、一應の整理が完了したところで、四九年三月をもって、解散した。豫定されていた報告書の出版は、いくつかの理由で、遅延しているが、四九年度中には、實現するのみである。

個人研究

東 方 部

- 中國古文書學 藤 枝 晃
- 中國運河史の研究 日比野 丈夫
- 中國における文學と美術の交流 田 中 謙二
- 民國初期思想史 島 田 虔次
- 魏晉老莊思想研究 福 永 光司
- 六朝貴族社會の研究 川 勝 義雄
- 唐代名人傳記資料の収集と年譜の作成 市 原 亨吉

殷周文物の考古學的研究

宋 代 開 封 の 研 究 梅 原 郁

疑偽經典の研究 牧 田 諦 亮

宋 代 の 科 學 と 技 術 山 田 慶 兒

中國の詩學 荒 井 健

現代中國文學の諸相 竹 内 實

中國古代官僚制の研究 永 田 英 正

六朝隋唐精神史 吉 川 忠 夫

明清思想史 小 野 和 子

白居易の住居 今 井 清

インド佛教思想史—大攝乘論に至るまで— 荒 牧 典 俊

明清における天文學・曆學・數學 橋 本 敬 造

南京臨時政府の研究 狹 間 直 樹

唐宋、五代、宋初の社會史 愛 宕 元

アジアにおける文化交渉の考古學的研究 桑 山 正 進

分類法の研究 中 西 惠 子

日 本 部 井 上 清

日本帝國主義の研究

日本勞働運動史 渡 部 徹

變革期における歴史と文化 林 屋 辰 三 郎

家族法の研究 太 田 武 男

横井時敬の研究 飯 沼 二 郎

日本近代文化の研究 吉 田 光 邦

日本ファシズムの研究 飛 鳥 井 雅 道

政治意識と政治行動 古 屋 哲 夫

日本帝國主義と東アジア 三 宅 一 郎

西 洋 部 副 島 圓 照

世界資本主義の構造 河 野 健 二

ヨーロッパ一五・一六世紀の社會と思想 會 田 雄 次

社會科學方法論 上 山 春 平

文化分析の基礎的研究 梅 棹 忠 夫

ルソウの政治思想について 樋 口 謹 一

宗教改革期ドイツの思想と社會 中 村 賢 二 郎

逆ユートピア小説の比較研究 多 田 道 太 郎

西洋論理想史 山 下 正 男

西洋論理想史 谷 泰

對人關係の比較研究 前 川 和 也

シユメール都市の比較類型論的研究 樺 山 紘 一

西洋中世社會史の研究 内 井 愼 七

歸納論理想と確率基礎論 樺 山 紘 一

西洋中世社會史の研究 小 南 一 郎

東方部研究會 一〇月三日 西王母と七夕傳承 永 田 英 正

四八年 居延漢簡の集成 林 巳 奈 夫

一〇月二四日 漢代の鬼神の世界 橋 本 敬 造

漢代の機械 漢代の機械 橋 本 敬 造

一〇月三十一日 タキシラ佛寺の伽藍構成

一月七日 林論文「佩玉と綬」批評 桑山 正進

福永論文「道教における鏡と劍」 會布川 寛

一月十四日 愛宕論文「唐代の郷貢進士と郷 荒牧 典俊

貢明經」批評 荒井 健

梅原論文「青唐の馬と四川の茶」 橋本 敬造

批評 市原論文「歴代詩選と曹學佺の 小野 和子

生涯」批評 桑山論文「ハツダ最近の發掘に 山田 慶兒

關する問題」批評 日比野論文「新獲の唐代蒲昌府 今井 清

一月二十八日 文書について」批評 藤枝論文「敦煌曆日譜」批評 狭間 直樹

四九年 小南論文「西王母と七夕傳承」 吉川 忠夫

六月五日 批評 林論文「漢代の鬼神の世界」批 田中 謙二

六月二日 評 秋山論文「漢代の倉庫について」 日比野文夫

六月十九日 批評 桑山論文「タキシラ佛寺の伽藍 荒牧 典俊

六月二六日 構成」批評

### 事業概況

開所記念公開講演會  
於 分館會議室  
四八年十一月十九日  
野村 雅一  
翻譯論「借用語と逐語譯」

文革後の中國文學 竹内 實  
— 配偶者の代襲相續權の問題を中心として —

昭和四九年度漢籍擔當職員講習會 太田 武男

文部省學術局情報圖書館課と本所附屬東洋學文 倉田淳之助

獻センターとの共催による第三回講習會は、五月 平岡 武夫

二七日から六月一日まで、左の如く行なわれた。 市原 亨吉

五月二七日 開會にあたって 永田 英正

漢籍目錄について 梅原 郁

經部書 倉田淳之助

漢籍カードの作り方 藤枝 晃

参考圖書解説 牧田 詠亮

史部書 佛典概説

寫本について 佛敎圖書館から見た漢籍(列品 高橋 正隆

五月二九日 佛敎圖書館において) 日原 利國

五月三〇日 子部書 長澤規矩也

五月三一日 和刻本について 日比野文夫

東洋學文獻センターの役割 市原 亨吉

六月一日 集部書・叢書 討議および情報交換

### 所員動靜

。秋山元秀氏を助手(東方部)に採用(四八年一 二月一日附)。

。松田 清・見市雅俊兩氏を助手(西洋部)に採

用。  
。橋本敬造助手(東方部)は辭任の上、關西大學 社會學部助教授として轉出。

。狹間直樹助手(東方部)は辭任の上、佛敎大學 文學部助教授として轉出。

。三宅一郎講師(日本部)は辭任の上、同志社大 學法學部教授として轉出。(以上三月三二日附)

。吉川忠夫(敎養部)助教授は當研究所助教授(東 方部)に配置換。

。牧田詠亮助教授(東方部)は、教授に昇任。

。小野和子・田中重雄兩助手(東方部)は講師に 昇任。

。福永光司教授(東方部)は、東京大學文學部教 授に配置換、當研究所に教授として併任。

。谷 泰氏(同志社大學工學部助教授)を助教授 (西洋部)に採用。

。森時彦氏を、助手(東方部)に採用。

。田中淡氏(文化廳文化財保護部建造物課文部技 官)は當研究所助手(東方部)に轉任。

。園田英弘氏を助手(日本部)に採用。

。所長河野健二教授は四九年三月三一日任期满 了、林屋辰三郎教授が新所長に就任、附屬東洋 學文獻センター長に併任。(以上四九年四月一 日附)

。飯沼二郎助教授(日本部)は、教授に昇任(六 月一日附)

。島田虔次教授は、四八年十一月二八日羽田發、 テキサス大學、パリ大學において中國思想史お よび近世史に關する研究を終え、一二月二八日 歸國。

。桑山正進助手は、四八年二月九日羽田發、ア

ラー・ウッディーン城跡・アグラ城・サルナー  
ト佛教遺跡・パシユパティナ寺院等の遺跡調査  
を終え、同月一九日歸國。

○横山俊夫助手は、四九年一月二八日伊丹發、タ  
マサート大學、デリー大學、テイロン農場等に  
おいて民族主義に關する研究調査を終え、三月  
二七日歸國。

○熊倉功夫助手は、四九年三月一八日羽田發、ハ  
ーバード大學、パリ大學、ミュンヘン大學等で  
日本研究についての調査研究及び資料蒐集を行  
ない、五〇年三月二二日歸國豫定。

○谷 泰助教授は、四九年六月八日羽田發、L・  
ボツコーニ大學でシンポジウムに出席し、ラク  
イラ、トルメツツオ近郊で山村調査を終え、六  
月二三日歸國。

○本學研修員規程により、本研究所において研修  
する外國人研修員とその題目は次のとおりであ  
る。

Kandel Joehen (ヴェルツブルク大學院生)  
公孫龍子の研究 指導教官 福永教授

期間 四八年一〇月～四八年一二月

Barara Kandel (西獨國立研究所研究員)  
太平經の研究 指導教官 福永教授

期間 四八年一〇月～四八年一二月

Willam Jan Boot (ライデン大學院生)  
日中思想史(江戸時代)の研究 指導教官 島田教授

期間 四八年一〇月～四九年五月

Murck Christian Frederick (プリンストン大學  
院生)  
明代史の研究 指導教官 島田教授

期間 四八年一〇月～四九年五月

期間 四八年一月～四九年一〇月

Blussé Van Oud-Alblas (ライデン大學院生)  
華僑の研究 指導教官 日比野教授

期間 四八年一月～四九年一二月

Halwig Schmidt Gintzer (ミュンヘン大學研究  
員)  
「弘明集」の研究 指導教官 牧田教授

期間 四八年一月～四九年二月

Collout Martin (ハーバード大學院生)  
日本禪宗史の研究 指導教官 林屋教授

期間 四八年一月～四九年二月

Busschau Godfrey Sheldon (ケープタウン大學  
院生)  
日本と南アフリカの關係について

期間 四九年四月～五〇年三月

James Gines (インデアナ大學)  
中國のプロレタリア文學 指導教官 竹内助教授

期間 四九年四月～五〇年三月

Bellefroid Emmanuel (獨協大學講師)  
清末の秋瑾女史の研究 指導教官 竹内助教授

期間 四九年五月～四九年八月

Mi Chu Wiens (カリフォルニア大學助教授)  
明代經濟史の研究 指導教官 日比野教授

期間 四九年五月～四九年八月

Nathan Sivin (ワシントン大學生物學研究セン  
ター所員)  
中國醫學史の研究

期間 四九年五月～四九年八月

出版物

紀要

人文學報 第三七號(紀要第六六册)

四九年二月二八日刊

東方學報 第四五册(紀要第六五册)

四八年九月二〇日刊

東方學報 第四六册(紀要第六七册)

四九年三月三〇日刊

歐文紀要 ZINBUN No. 13.

四九年三月三〇日刊

研究報告その他

東洋學文獻類目 一九七二 東洋學文獻センター

編 四九年三月三〇日刊

異端運動の研究 會田雄次・中村賢二郎共編

四九年三月三〇日刊

弘明集研究 卷中(譯注篇上) 牧田諦亮校記 四

九年三月三〇日刊

京都大學 人文科學研究所 洋書圖書目錄 四八年三月三十一

刊  
宋元學案 人名字號別名索引 衣川強編

宋元學案補遺 四九年三月三〇日刊

永樂大典 卷六百六十五 卷六百六十六 用本所

所藏本影印 附解說 日比野丈夫 四八年九月二

九日刊